

困難な文人論への単独の挑戦

河内利治著
黄道周研究

谷口 匡



A5判 656頁
汲古書院
[本体 16,000円 + 税]

——水落ちて石出づるとえ、歴史の大河が激しい瀬をなして流れを変えるとき、人ひとりひとりの生き様はその根元まであらわになる。……明末清初という時代は、そうした意味でしばしば振り返られる時代であり、江左の士大夫たちは、とりわけ厳しく個の生の選択を問われた人達だった。

これは、伊藤虎丸「言志」から「溫柔敦厚」へ——朱彝尊における政治と文学」（『近代の精神と中国現代文学』）の書き出しである。本書評を執筆するにあたってこの論文をもう一度読み直したのは、著者の黄道周研究へのアプローチに伊藤氏の朱彝尊論と同質の問題意識を感じたからである。本書が対象とする黄道周（一五八五～一六四六）は、朱彝尊（一六二九～一七〇九）よりも年齢的には一代以上前にあたり、むしろ出自や経歴も異なる。なかんずく清朝に出仕したか否

かの点で両者には大きな隔たりを認めうるものの、ともに明末清初という激動の時代を生きた士大夫である一点は共通している。

私事に亘って恐縮ながら評者はもう三〇年ほど前、大学院の後半から就職したての頃にかけて、朱彝尊研究を手がけたことがあった。ただ今からふり返るとそれは、朱彝尊の詩論や詩風の特徴・変遷を表面的になぞったにすぎず、明末清初という時代背景と真に切り結んだものではなかった。伊藤氏からも「東洋史や思想史の本もお読みなさい」とご指導いただいたいた苦い思いがある。この点本書は異なり、黄道周が生きた時代と真正面から向き合っており、その文人としての意味を長年に亘って問い続けた、文字通りの労作である。

著者の河内利治さんは、評者がかつて学んだ筑波大学

院博士課程文芸・言語研究科各国文学専攻中国文学研究室における先輩である。正確にいえば評者の入学は一九八五年、著者はその翌年だから学年では評者より一つ下だが、それ以前に、同大学芸術専門学群在学中に浙江美術学院（現中国美術学院）へ二年間留学、学部卒業後、一旦修士課程芸術研究科へ二年間進学といった経歴もある。この期間に今井凌雪（筑波）、沙孟海（浙江）という名だたる書家でもある二人の

恩師に指導を受け、留学中に出会った黄道周の行草作品に衝撃を受けたことから本書の研究が始まった。すなわち著者の黄道周研究は書家としての側面から着手され、ついで中国文学の手法から再構築されることとなる。当時の中国文学研究室の主任教授は内山知也先生であり、内山先生は唐代小説研究と並行して、沈周・文徵明・唐寅・袁宏道といった明代文人に関する論考を次々と発表されていて、一九八六年一月には『明代文人論』が刊行される。この内山研究室での院生時代から著者の文人論としての黄道周研究がスタートする。

思うに、黄道周研究の難しさは少なくとも二つあるだろう。一つは、彼が残した作品が詩文書画の諸芸術や経学史学など多岐に亘るため、それぞれの分野に通じる必要があることである。私たちは内山先生が主宰された明清文人研究会の中で、その成果として『傅山』『鄭板橋』『徐文長』『唐寅』

の四冊を刊行することができたが、それらはすべて共同研究であった。著者は本書においてこれに単独で挑んでおり、まずはこの困難がある。

本書は序章「研究序説」で研究の目的と黄道周の著作の概要を述べ、第一章「黄道周の生涯」でその家系と生涯を概観して詳細な年譜を作成し、第二章「黄道周の表現営為」で彼が遺した著述や書作について検討を加え、第三章「地理学者徐霞客との交友」、第四章「詩人陳子龍との交友」、第五章「翰林倪元璐との交友」で関係の深い人士との交友を検証し、第六章「継室蔡玉卿から見た黄道周」で同じく書をよくした二度目の妻・蔡玉卿の生涯と書画を論じ、第七章「黄道周の書法観」で彼の書の特質を明らかにし、第八章「後世への影響」で黄道周の書跡が後世にどう評価され伝来したかを追う。さらに附章「訳注「黄道周の學術傾向」」では、二〇一七年に刊行された初の排印本の別集『黄道周集』（中華書局）の巻頭に載せる陳来氏の論考「黄道周的生平与思想」よりその學術に関わる部分を訳出し、結章「明末に生きた文人の二典型」で再度その経歴と著述・交友をふり返り、研究の総括を行っている。附録として底本にした別集・陳寿祺編『明漳浦黄忠端公全集五十卷・年譜二卷』（内閣文庫蔵・道光十年本、以下『黄漳浦集』）の全詩文名の目次と題名に現れる

人名を五十音順にした一覧などが巻末に置かれる。このように、著者は黄道周という一文人について、詩文・書・学術・交友といった諸方面からの多角的な考究を単独で試みており、一々の資料の丹念な調査や読解に対する苦勞がひしひしと伝わってくる。

そして困難の二つめは、彼における詩文書画があくまでも「余技」にすぎないことである。著者は清初には「詩文書画は文人の余技であると考えた伝統派文人」と「職業として独自の価値を持つ芸術だと考える新興書画家」が並存し、黄道周は前者の代表だとする（序章第一節・（四））。つまり本人の意識では余技にすぎないものをどう位置づけるかの難しさである。

とりわけ書については、福本雅一「黄道周」（『明末清初二集』）が「書を作るは是れ学問中の第七、八」（黄道周「書品論」）を引用しつつ、「彼の書を見る時、この言葉を反芻することは、恐らく最も重要なことであろう」といい、松村昂「『死は吾が分なり』——黄道周と倪元璐——」（『明清詩文論考』）でも、黄道周と倪元璐の書跡を鑑賞するにあたり、「その前に、それぞれの言説や行為の実際を念頭におく必要がある。そこから、彼らの書跡が、その行動どおりであるのか、はたまた意外な側面を垣間見せることになるのか、といった鑑賞や評価

が可能になるだろう」と述べる。そもそも黄道周は日本では一般にはまず書家として知られ、そのあとで彼の作品にじみでる明末の烈士としての側面が意識されるといふ順序をとるのではなからうか。著者の研究もまさにそうであり、最初は美学としての書法観の追究や書画作品の解題・分析から始まって、ついでその思想や交友の考察に移った。その人物を明らかにすることなくして彼の芸術の真の意義を考究することは不可能という認識によるものであろう。

では本書では黄道周をどう捉えているか。著者によれば彼が忠孝の儒者として抗清の立場を堅持した生き方を貫いたのは、まず宋学を学んだ父・黄季の影響に淵源がある（第一章第一二節）。そして経史の学問が彼自身の思想基盤を作り、当時の政治集団である東林党の人士との交友の中で正義の気風を会得し、読書学問によって腐敗した政治を正そうとする精神を文学結社である復社に伝えようとした。著者はその際に彼が経学と共に重んじたのは史学であったとする（第二章第一節）。

その現われの一つと本書を読んで感じたのは、『広名将伝』なる著作である。これは歴代の名将百数十人の伝記に黄道周が批注を加えたものであり、『黄漳浦集』巻三十四・三十五に収める「懿畜」という歴代の忠臣の伝記とあい補う（第二章

第三節)。

さらに杜甫の詩が当時の時事を詠じて「詩史」と呼ばれるのと同じ側面が黄道周の詩にもある。著者がとり上げているのは『黄漳浦集』巻四十四に収める二首で、これらは順治二年(一六四五)から黄道周が処刑されるその翌年にかけて作られたもので、抗戦ののちすでに清兵の捕虜となつていて自身的心境が吐露される(第二章第四節)。

このような詩からは、黄道周が最後まで清朝に抵抗して明朝への忠節を貫いたことがよく窺えるが、一方で朝廷の重臣でありながら政治的には無力で、所詮は「無能の忠臣」だったとする厳しい見方も存する(福本雅一「孤臣の死」『類筆集』)。これに対し著者は、黄道周は経史の幅広い学問を行動の基盤とし、消憂のためではなく自らの主義主張を提唱するための

媒介として詩文や書画を制作した気概ある文人だったが、崇禎帝からは諫言を聞き入れられず、政治が衰退し悪化する時代の中で悲劇的運命を辿つたと結論づける(結章ほか)。そして、こうした著者の黄道周に対する肯定的なまなざしは本書の中で一貫している。

著者の専門的な識見が最も發揮されるのは黄道周の書法観や書跡を論じた第七章と第八章であり、そこでも上述の黄道周観を背景に、人品・人格と芸術性との関係から考察がなされている。その中で「適媚(しゅうび)」の評語を軸にした書法美の分析は、前著『書法美学の研究』での考証も踏まえた著者の独擅場で、他の追隨を許さぬものといつてよいと思う。ただ本書の目的はそうした表現営為そのものよりも、むしろそれを基盤にして「黄道周を中心とする明末の文人交友の実体を立証

荒川清秀 著
日中漢語の
生成と交流・受容

—漢語語基の意味と造語力の観点から—
日中両国語に共通する漢語がいか
に生じ伝わり共通になったかを造
語における語基の問題から探求。
A5判456p. ■4800円

木村英樹 著
中国語文法の
意味とカタチ

—「虚」的意味の形態化と
構造化に関する研究—
現代中国語の文法的現象から文法
的意味と形態、文法的意味と構造
の対応のありようを明らかにする。
A5判362p. ■3800円

楊凱栄 著
中国語学・
日中対照論考

“了”、スコープと焦点、数量強調、
全称表現、ヴォイス、構文の意味と
構文の相違、語用論をめぐる17編。
A5判376p. ■4600円

趙敏俐 主編
李均洋・佐藤利行・小池一郎
日本語訳主編
中国詩歌史通論

各時代の詩歌の発展特徴、漢民族
の詩歌と少数民族の詩歌との繋が
りなど、新たな中国詩歌観を確立。
A5判646p. ■12000円

森野繁夫 訳注
謝宣城詩集

唐詩への道を開いた六朝時代の
詩人、謝朓。その全作品に書き下
し文と訳、訳注を施した。巻末に
「謝朓伝」「謝朓年譜」を付す。
A5判536p. ■15534円

白帝社 ※価格は税別
〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

すること」(序章第一節)にあるという。この点について評価を加えることはもとより評者の力の及ばないところだが、本書がそれを解明するための豊富な材料を提供してくれていることだけは確かである。

最後に書学の素人から素朴な質問をしてみたい。黄道周の書法観を論じての結論で「人品と書品を混同する前近代的な視点から書芸術を論じるという陥穽におちいってしまっている」と指摘する箇所がある(第七章第一節)。恐らく倪元璐に対する過度な高評価や逆に張瑞図に全く言及しない態度を指すのだろう。ただ一方で黄道周の書芸術がその人品の高さゆえに評価されてきたのも事実だと思われる(第八章第一・二・四節)。彼が明末清初という苦難の時代をいかに生きたかということ、その書芸術としての価値は切り離せないと評者も感じるが、この「人品」と書の関係はどう考えればよいのだろうか。

冒頭にとり上げた伊藤論文の末尾で、清朝における学術の変質、たとえば致用の学がなぜ考証だけになったかという問いは、朱彝尊の詩論の微妙な変化と実は関係することを氏は示唆していた。著者は黄道周の精神と行動は清朝の考証学(実践を重んじる「経済の学」の意で著者は用いる)へ展開していくとするが、彼の詩文書画に具体的にそれがどう現れるの

か、その様相をもっと知りたいと感じる。著者のライフワークである黄道周研究が今後さらに深化する中で、こうした困難な課題も解明されることを期待している。

【参考文献】

- 伊藤虎丸『近代の精神と中国現代文学』(汲古書院、二〇〇七年)。
内山知也『明代文人論』(木耳社、一九八六年)。
内山知也監修、明清文人研究会編『傳山』(芸術新聞社、一九九四年)。
同『鄭板橋』(芸術新聞社、一九九七年)。
同『徐文長』(白帝社、二〇〇九年)。
同『唐寅』(白帝社、二〇一五年)。
河内利治『書法美学の研究』(汲古書院、二〇〇四年)。
翟奎鳳・鄭晨寅・蔡傑整理『黄道周集(全六冊)』(中華書局、二〇一七年)。
福本雅一『書の周辺 類筆集』(二玄社、一九八一年)。
同『明末清初二集』(同朋舎出版、一九九三年)。
松村昂『明清詩文論考』(汲古書院、二〇〇八年)。
(たにぐち・ただし 京都教育大学)